いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

家庭内DIGで点検

屋内外の危険箇所、図に

考える

新年度を迎えた4月。進学、就職、転勤などの理由で、新居に移り住んだ人も多いはず。引っ越しや新生活のスタートを契機に、住まいの安全確認をしてはどうだろう。静岡県が普及を進める災害図上訓練「家庭内DIG(ディグ)」は、家の中の危険箇所を簡単にチェックできる。

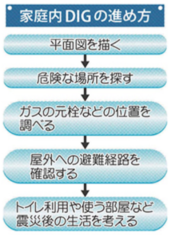
DIGは「Disaster(災害)」「Imagination(想像力)」「Game(ゲーム)」の頭文字を組み合わせた。地図上で災害時の行動をシミュレーション。災害で地域や組織がどんな被害を受け、どんな対策が必要かを見つける訓練として、自治体や企業が導入している。

静岡県が家庭版を作ったきっかけは、駿河湾を震源に発生した2009年8月11日の地震だった。マグニチュード(M)は6・5で、静岡県沿岸部で震度6弱を観測。1人が大量の本の下敷きになって亡くなったほか、家具の転倒などで319人がけがをした。家具から身を守るだけでなく、震災後も自宅で暮らせるようにするのが狙い。

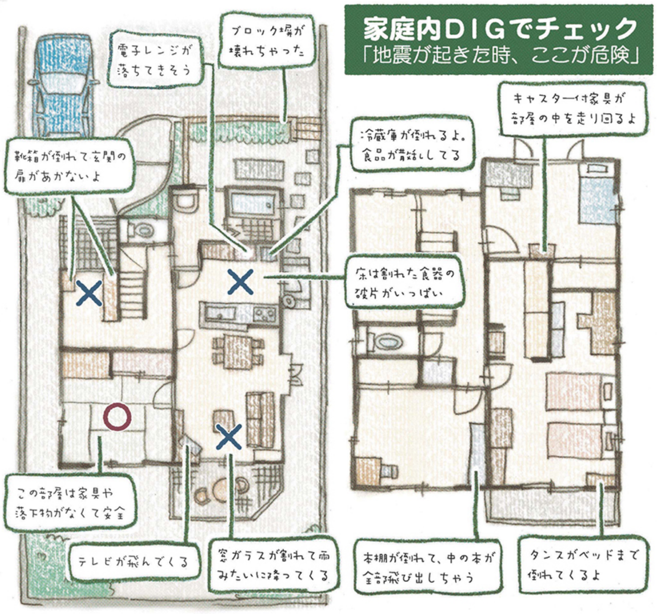
手順は簡単で、子どもでもお絵描き感覚で取り組める＝図解＝。自宅の平面図をスケッチした後、家族で話し合いながら、固定が必要な家具はないか、落下物はないかなど屋内外の危険箇所を描き入れる。

停電復旧後の通電火災に備え、電気のブレーカーの位置を確認するほか、扉周辺の障害物も点検する。震災後に生活する部屋、備蓄品の置き場所も考え、描き加える。

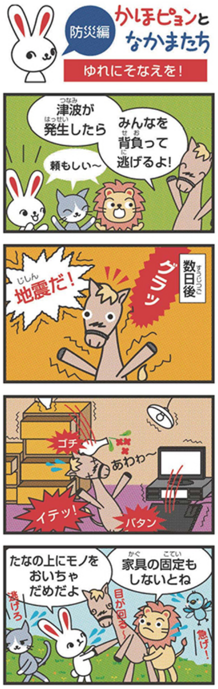
静岡県では、県内の小学5・6年生に資料を配布し、授業で活用している。資料は静岡県危機管理部のホームページからダウンロードできる。


家庭内DIGの進め方
平面図を描く
危険な場所を探す
ガスの元栓などの位置を調べる
屋外への避難経路を確認する
トイレ利用や使う部屋など震災後の生活を考える

■新年度、住まいの安全 大丈夫？


家庭内DIGでチェック
「地震が起きた時、ここが危険」
ブロック塀が壊れちゃった
電子レンジが落ちてきそう
靴箱が倒れて玄関の扉があかないよ
冷蔵庫が倒れるよ。食品が散乱してる
キャスター付家具が部屋の中を走り回るよ
床は割れた食器の破片がいっぱい
この部屋は家具や落下物がなくて安全
テレビが飛んでくる
窓ガラスが割れて雨みたいに降ってくる
本棚が倒れて、中の本が全部飛び出しちゃう
タンスがベッドまで倒れてくるよ

※静岡県「家庭内DIG」の資料を基に作成


かほピョンとなかまたち
防災編
ゆれにそなえを!
津波が発生したら
みんなを背負って逃げるよ!
頼もしい〜
地震だ!
グラッ
数日後
ゴチ
あわわ〜
イテッ!
バタン
たなの上にモノをおいちゃだめだよ
家具の固定もしないとね
逃げろ
目が回る〜
急げ!

静岡県危機報道監 岩田 孝仁さんに聞く

家具の固定、ガラス飛散防止など実行を

自分や家族の命を守る上で自助の役割は大きい。静岡県では県民に対し、建物の耐震化とともに、家具の固定と水・食料の備蓄を最優先でお願いしてきたが、家具の固定の普及率は7割、備蓄は4割で頭打ちになっていた。2009年の地震をきっかけに、家庭内DIGを使って啓発に取り組んでいる。

大きな地震では、家具が倒れるだけでなく、テレビや電子レンジが飛んできたり、キャスター付きの家具が部屋を走り回ったりする。食器や照明などが落ちて割れると、破片が床に散乱する。

東日本大震災の後、津波からの避難行動が注目されているが、揺れへの対策をしないと、避難路がふさがれ、家から外に出られないリスクが高まる。沿岸部では津波から逃れるためにも、屋内外の安全確認が重要だ。

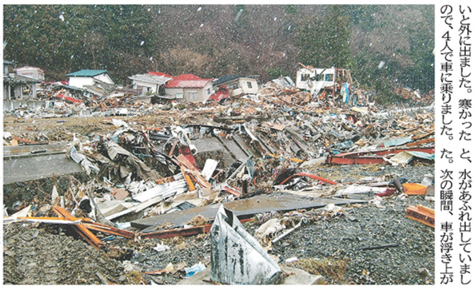
ぜひ家族でテーブルを囲み、平面図を描き、話し合い、危険箇所や安全な空間を確認してもらいたい。そして家具の固定、物の落下防止、ガラスの飛散防止などの対策を実行してほしい。

引き波、母・めいと離れる

伝える

2011.3.11

■内陸深く浸水、車押し流す（宮城・女川町）



津波が内陸部深くまで達し、家屋が流失した宮城県女川町清水地区＝2011年3月16日(女川町提供)

津波は宮城県女川町内の川をさかのぼり、同町女川浜の当時高校1年生だった阿部真奈さん(18)と家族が一時身を寄せた車を押し流した。車から脱出した阿部さんを、引き波が再び襲った。

自宅の居間にいると、地鳴りとともに家が大きく揺れ、その後、携帯電話の緊急地震速報が鳴りました。部屋のドアを開けて、避難路を確保しました。それが家族の約束だったからです。

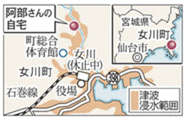
家にいた母と義理の姉、めいと外に出ました。寒かったので、4人で車に乗りました。余震のたびに周囲の木ががさがさと揺れ、遠くでは津波警報を告げる防災行政無線が鳴っていました。

30分ほどたったころだと思います。防災行政無線が聞こえないことに気付きました。家の近くを流れる女川を見ると、水があふれ出していました。次の瞬間、車が浮き上がったのです。

阿部真奈さん

海は1・5㌔ほど離れ、見えません。家族からチリ地震津波(1960年)の時は、自宅まで波は来なかったと聞いていたので驚きました。

車は流され、木にぶつかって止まりました。助手席のドアのガラスが割れたので、そこから4人で脱出しました。周囲は海のようでした。全身が水に漬かりました。



近所の家と共に、しばらく押し波に流された後、濁流が穏やかになったと思ったら、突然、引き波が始まりました。

がれきにつかまって100㍍ほど流されて足が届く場所にたどり着き、水際から離れました。近くに義理の姉がいましたが、母とめいの姿はありません。

雪が降っていました。女川の対岸にある公営住宅から、お年寄り夫婦が声を掛けてくれました。がれきを乗り越え、たどり着くと、夫婦は毛布を出してくれました。

その後、山道の入り口に向かいました。たき火がたかれ、見知らぬ人同士が助け合っていました。着替えをもらい、丸太に座って、一夜を過ごしました。

翌朝、総合体育館に向かいました。自宅があった辺りは家が一軒もありませんでした。

震災で母、めいだけでなく、祖父も亡くしました。幼いころに父を病気で失っており、祖母と2人暮らしになりました。

震災の年の5月、女川さいがいFMでパーソナリティーを始めました。自分の思いを話すことで、少し気持ちが落ち着いたような気がします。

今月、東京の大学に進学しました。女川町を離れても、家族を亡くした後悔の気持ちと、地震発生時は「もしかしたら」と考えて行動する教訓を、語り続けたいと思います。

探る

東北大助手

保田 真理さん

自然災害の発生は止めることはできない。しかし被害は小さくできる。東日本大震災後、切実に感じている。

では、具体的に何をすればいいのか。いろいろ対策をしておけばおくほど、減災率は向上するが、あまり多くのことをしようとすると、多くの人は挫折してしまう。

まずは、できることから始めてみよう。例えば、家族の避難計画を決める。家具の固定、食料や燃料の備蓄をする。このあたりから手を付けてみてはどうか。

被害縮小への工夫、家庭で楽しく

家庭で話し合いをするだけでも、一人一人の意識は大きく変わる。自分の役割が見えてくると、自分の準備に取り組めるからだ。お父さんは家と家具の安全管理大臣、子どもは避難路確認大臣、お母さんは備蓄品管理大臣など、家族の閣僚名簿を作ってもいい。

減災意識 ツールで高める

減災する意識が、日常の生活の中にごく自然に存在するようになれば、社会全体がとても強くなる。各人が3日間、自分たちだけで生き延びることができたなら、共助、公助にスムーズにバトンタッチすることができる。

減災活動が大切なのは周知の事実だが、なぜ波及しないのか。どこか他人任せな気持ちがあるのと、減災に興味や楽しみがないからだと思う。

やすだ・まり　兵庫県生まれ。甲南大卒。98年東北大災害制御研究センター研究支援員を経て、12年から東北大災害科学国際研究所助手。NPO法人防災士会みやぎ副理事長。宮城県防災指導員。社会貢献活動支援士。専門は減災教育。57歳。

そこで考えたのが、さまざまな減災ツールだ。普段、持ち歩いて使える風呂敷に、減災に必要な事柄を染めた「減災風呂敷」。備えや非常時の行動をA6サイズにまとめた「みんなの防災手帳」は、各家庭に1冊常備してほしい。小さく折り畳めるポケットガイドは、小中学生が携帯することを想定して制作した。

ハンカチの「減災ポケット」は、日頃の備えと災害発生時の行動を分かりやすい表現で生地にプリントしている。防災士仲間4人で、幼児向けの減災絵本「リオン」も作った。

非常食のレシピを考え、調理する「サバメシ」も震災前から取り組んでいる。これらは、楽しみながら学び、自分なりに減災意識を向上させることができる。

そこが狙いだ。自分のものにして、自分なりに使いこなす。そこから独自の発想が生まれてくれば、減災の意識が高まり、対策を考えることが楽しくなる。

これは子どもにいくら勉強が大切だと説明しても、本人がその気にならないと勉強しないことに似ている。子どもに限らず、大人も興味のあることはどんどん探求する。

ちょっとだけ好奇心をくすぐって、後は各自のやる気を引き出す。そこから一人一人の減災力が向上する。そんな信念を持ち、周りの人を巻き込み、支えられながら、日々模索している。

現場から

知識より意識 さらに啓発

宮城県総務部危機管理監
石森建二さん(58)

東日本大震災を受け、県民の防災意識はかつてないほど高まっています。非常にいい機会と捉え、県教委と連携して小中学生向けの防災教育を充実させたり、各地で避難訓練を実施したりして啓発に努めています。

防災で大切なことは知識ではなく、意識です。震災後はガソリンが不足しましたが、小まめに満タンにしておく習慣があれば安心です。風呂を掃除したら、すぐ水をためることも有効です。

これまでも意識付けはしてきましたが、浸透していませんでした。自分の身は自分で守る「自助」の精神を県民が持ち、防災を常に考えた生活を心掛けるよう取り組みを進めたいと思います。

避難時の荷物、母親ら提案

ハッピーママ「親魂部」代表
西出あきさん(36)

仙台を拠点に活動している子育てサークルです。3月に発行したフリーペーパー「オヤタマvol.5」で、防災特集を組みました。避難の際に子どもに持たせる「防災カード」や、持ち出す荷物を確認するための「第1次避難バッグチェックシート」などの付録付きです。

小さな子どもと避難する際はあめなどの菓子、おもちゃ、おんぶひももあると助かります。メンバー7人で震災当時を思い出し、母親の視線で必要な物、不要な物をあらためて考えました。

ただ、実際に準備した荷物は相当重くなりました。地域や家族構成によっても状況は違います。特集をきっかけに、家族で防災会議を開いてもらえたらうれしいです。